

小金井雑学大学

だより

第4号

平成10年12月20日発行

都立高校の

施設開放を進める一助に

小金井雑学大学の開校は、教室となる場所が決まったことで、実現されたと言っても過言ではありません。その場所を提供してくれたのが、都立小金井工業高校です。小金井市内の中間地点にあります。

現在使わせていただいているのが、正面玄関をはいってすぐ右手にある会議室です。七〇〜八〇名はゆっくり座れますし、椅子を補助することによって百人以上の方が講義を聴くことができます。

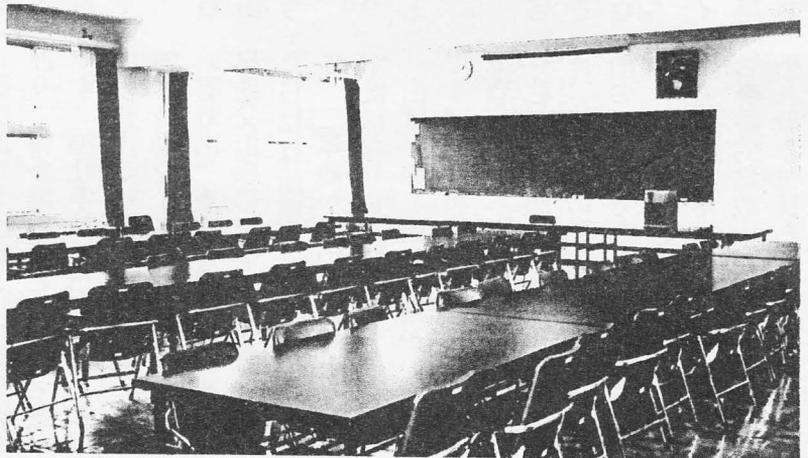
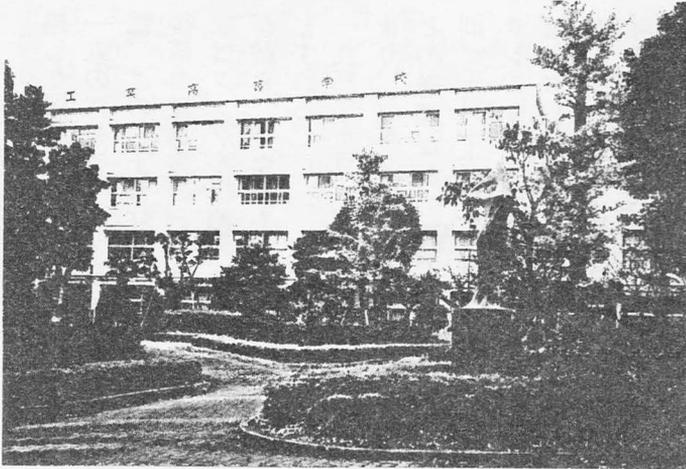
施設使用第一号

東京都は都の施設である高校を、地域の利用のために開放していこうとしています。これまでもグラウンドなどは地域のスポーツ団体に開放されていましたが、教室等の開放はその管理など問題もあり、なかなか開放が進みませんでした。現在、都内各地で開放の試みが始まったところです。小金井工業高校では小金井雑学大学が第一号になります。

近年学校は、地域との接点も少なくなっています。お互いをよく知るためにも学校の開放は意義あるものと思います。学校行事の妨

げにならない範囲で、できるだけ地域の人々の利用への開放を望みたいところです。

そういった意味では、小金井雑学大学の試みもこれからの施設開放のステップになるわけで、先に続くことを願いながら、着実に実績を積み重ねて進めていきたいと思えます。



第十三回講義 十月四日

『フランス革命と

マリーアントワネット』

教授 兵頭信彦氏

オーストリアのハプスブルグ家

の娘として父フランツ一世、母マ

リア・テレジアの間に生まれたマ

リー・アントワネットは、フラン

スのブルボン家と手を結ぼうとす

る政府の意向で、一七七〇年仏の

王太子ルイと結婚。彼女は十四才

ルイは十六才。当初は彼女に対す

る仏国民の人気は抜群。彼女はそ

の人氣に有頂天となる。母親マリ

ア・テレジアは、それが心配でし

ばしば忠告の手紙をよこす。一七

七四年ルイ十五世の死で、夫は十

六世となり、彼女は仏王妃とな

る。しかし、浪費癖があり華美な

生活に明け暮れる彼女はしだいに

パリ市民の悪評の標的となる。

八九年フランス革命勃発は彼女

の立場を一変。王室の不安を一身

に引き受けた彼女は、事もあろう

に一家の国外逃亡を図ったが、ヴ

アレンヌで捕まり失敗。以後国民

の猜疑は深まるばかり。九二年四

月、対外戦争始まり時局急変。激

昂した民衆は九二年八月十日王室

一家の住むチュイルリー宮殿を襲

撃、この日王権は停止される。以

後革命は過激の一途をたどり、一

家はタンブル塔幽閉、国王の処刑

が続き、彼女にも運命の終焉がお

とずれる。

九三年十月、彼女への裁判が始

まり、反革命・国費の浪費・外国

との通謀などの罪で、判決は死

刑。十月十六日十二時十五分ギロ

チンで断首。享年三十七才。遺体

はマドレーヌ墓地に放置された

が、十九世紀王政復古期に、夫ル

イの遺体と共に歴代仏王家の墓地

のあるサン・ドニに埋葬。

彼女が時代の動向を正しく洞察

する聡明さを持ち、あるべき仏王

妃として、また国母として、の自

覚があつたならば、フランス革命

の在り方も異なつたものになつた

のではなからうか。しかし、多く

の犠牲を払つた革命ではあつた

が、歴史は、彼女の在り方を超え

たところで新しい価値を、すなわ

ち新しい時代を生み出したことを

見落としてはならない。

第十四回講義 十月十八日

『山と文学―多摩・秩父の

山歩きと不思議物語』

教授 竹村鏝郎氏

山は中高年によつて占領された

と言われて久しいですが、中高年

なればこそ、自然を愛で山頂を踏

む喜びだけでなく、山にまつわる

歴史、文学、詩歌などを想いなが

らの山行は、一層心なごむさわや

かな気持ちにさせてくれます。

日和田山。低山ですが約千三百

年前、この地に一大高麗王国が出

現したシンボルの山である事を考

えると、とても愛着を覚えます。

高山不動尊。静寂の中にひそや

かに建つ大伽藍が、かつて関東三

大不動尊の一つと言われたとは、

まさに時代の変遷を感じます。

両神山。深田久弥著「日本百名

山」に雲取山と共に選ばれている

南関東の数少ない名山で、頑丈な

岩の砦のような山容が魅力です。

浅間尾根。よく整備されたハイ

キングロードと思つていたこの尾

根道が、昔の生活古道であつたと

は驚きです。川沿いより尾根歩き

を。感銘します。

高水三山。「花の百名山」の著

者田中純江さんがこの山をこよな

く愛され登山グループ「高水会」

をつくっているのは有名です。四

月初め頃、三山の一つ高水山の近

くの斜面で春の名花かたくりの群

生が見られます。

御岳山。登山者と神社参詣客が

混り、奥多摩銀座とも言える賑い

です。神社手前の小広場は、作家

中里介山が小説「大菩薩峠」で奉

納試合場をイメージした場所。

雲取山。東京都最高峰の当山は

奥秩父山系の東端にあたり、晴れ

た日には新宿も見える展望の良

さ、二年前から山小屋のトイレも

水洗になりました。

山は平地と違い危険がいっぱい

です。初心者には常に控えめな計画

で登山をすべきです。

私が直接聞いた女性遭難者の場

合、初めての登山で十一月下旬の

雨の日にいきなり大岳山から御前

山へ登り、夜七時過ぎ奥多摩湖へ

下る途中滑落して大けがをしなが

ら奇跡的に救出されました。山を

恐れ敬う気持ちで接すれば山もこ

れに伝えてくれて、自然を満喫す

第十五回講義 十一月一日
『北京の庶民生活』

教授 吉武百合氏

十五年中国語の通訳をしてきた。会議通訳の仕事は会議と技術の接触は少ない。決心をして通訳を一時休業、中国の生活を味わうことにした。国際ボランティア団体の紹介で、北京で一年日本語教師をすることにし、学生四百人の小さな大学を選んだ。

大学関係者の宿舍は広いキャンパスの一角にある五回建てのレンガ造り、一戸は五十平方メートル強。天井高三メートルなので、夏冷房なしで涼しく、冬は温水暖房で、築二十年以上なのに快適だ。

通常ここに三、四人の家族が住む。教師の給料は低かったが、編物や料理等で節約していた。北京人のファッションセンスは、私たちと同じで自転車に乗る若者はジーンズにウオークマンを、娘達は花柄や黒のミニスカートがキマツテいた。老人や田舎からの青年は人民服の人もいた。

中国人がエネルギーシユなのは

熱々のできたてをワイワイ言いながら楽しく食事をするからだ。食材は安くて新鮮で豊富である。特に北京は平地なので、朝夕の自転車を通勤通学で体力が尽くし、内

戦・災害・文革と何世代にも厳しい歴史的環境に育った中国人は、精神的にも肉体的にもやはり強い。厳しい気候風土、生活や交通の不便さの中で、家族の強い結びつき、厳格な師弟関係、祖国への愛を通じて、実質的に助け合い「遠くの親戚より近くの友人」の近所つき合いが根づいている。一昔前の日本の良さ、人のぬくもりが息づいていた。

学生は良く勉強する。日本の新人類と気質は似ているが、少々粘り強くたくましい。

中国人の思考方法と人間関係は複雑だ。二十年中国に関わりと寄せていてもここに住み始めた頃は、習慣の相違等で小さな様々な葛藤があった。しかし、拝金主義・官僚主義蔓延の現代中国にあつて、学習上仕事上得た有力コネに一切たよらず、あくまで一人の日本人女性として通じた北京の一年は、まさに十年の学習に値するほど貴重であつた。

第十六回講義 十一月十五日
『おばQ、おそ松くんの誕生』

教授 たみお道雄氏

今年の紫綬褒章を「おそ松くん」の作者赤塚不二夫さんが受章した。

「おそ松くん」が出る二年前、小学館は初めての子供向け週刊誌「少年サンデー」を発行したが、売れ行きは横這い。当時は科学・テレビ・ニュース・マンガの四本柱で成り立っており、総合雑誌的雰囲気でもパンチにかけていた。マンガに対する批判も強く、漫画排撃運動もあつた。

当時掲載中の横山光輝さんの「伊賀の影丸」が四週間休むことになり、その穴埋めに採用したのが赤塚不二夫さん。四週間分の穴埋めだったので新人を起用。当時無名であつた赤塚不二夫さんに相談したら「おそ松くん」という題名。まずいという意味があるので抵抗があつた。しかし、届けられた第一回目の原稿は非常に面白く、従来にない強烈な笑いがあつた。大ヒットとなり二、三百回も続いた。その面白さの秘訣は登場

する大人が、子供以上に子供っぽく、ユーモラスであり、子供と本気でつきあう。

一年も経たないうちに、また「伊賀の影丸」が四週間の休みに入ることにになり、今度もトライのチャンスと思い、子供の頃見た夢から、すごい力を持ったものが自分のためだけに力を発揮する主人公を考えついた。かわいい宇宙人の「おばけのQ太郎」が誕生。藤子・F・不二雄さんが担当し大ヒット。その後小学館のキャラクターとなり、「おばQ音頭」も出て、「おばけ」は怖いものでなく、かわいという意味に変わった。

「おばQ」人気の理由は、宇宙時代の先取りである。子供は次の時代を本能的にキャッチしたのでしよう。

(付)藤子・F・不二雄さんは不朽の名作「ドラえもん」を残さず、先年亡くなられました。赤塚不二夫さんには「ひみつのアッコちゃん」など、数多くのヒット作があります。今、食道ガンを病んでいられますが、「仕事かたてこ

今後のカリキュラム

12月20日「河川の生物と自然保護－ホタル、アユ、貝類の生活史から考える」

西脇三郎氏（筑波大学医療技術短期大学名誉教授）

平成11年

1月17日「世紀末ウィーン文化とユダヤ人」 村山雅人氏（國學院大学教授）

1月24日（臨時講義）「杜甫の魅力」 田部井文雄氏（本学学長）

（講義終了後、学生・受講生との交流会開催）

2月7日「草食の思想－日本人の特性を考える」 國米家己三氏（元産経新聞記者）

2月21日「苗字からルーツ・先祖を探る」 野中冨雄氏（日本家系図学会理事）

3月7日「（仮）金融ビッグバンについて」

3月21日「マイクとともに半世紀」 野瀬四郎氏（元NHKアナウンサー）

・教室は小金井工業高校会議室。時間は午後2時～4時です。

・スリッパをご持参下さい。

・参加費は無料。出席はいつでも自由です。ご都合に合わせてご参加下さい。

・前の講義の資料がほしい方は、残っている場合がありますから、申し出て下さい。

1周年記念講演のお知らせ

小金井雑学大学が開校して平成11年春で1年になります。

4月4日（日）1周年の記念講演として、加藤三郎氏による環境問題を予定しています。

詳細は後日お知らせいたします。大勢のご参加をお待ちしております。

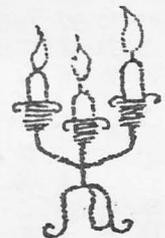
編集後記

一つの道をまっすぐ歩いていく人の話は、聴いているだけでも充分楽しいものである。豊富な知識だけでなく、こだわることの情熱が、かもしだす雰囲気は聴く者に反映するのだろう。

情報が氾濫していて何でも知ることができるようで、実は残るものが少ないという現代社会において、じっくりと話を聞くことの楽しさを実感するこの頃である。

聴いたことを自分なりに考えるのもまた満ち足りた時間である。

（五十嵐記）



発行責任者 五十嵐京子
小金井市本町

VJ&FAX

（夜間）